

## いくさをうたう 小林賢太

八月は一年のうちで、とりわけ強く戦争を意識する月だろう。この原稿を書いている二〇二三年八月も、戦争関連の報道は多く、中には戦争詠を朗読や書で伝える活動など、短歌に関わる報道もある。戦争詠は戦地へ赴いた兵だけでなく、彼らを送り出し、帰りを待つた女性たちも詠んだ。戦時中の新聞歌壇より引用。

・兵となる吾子はも心ととのへて今は待つのみ召されゆく日を

(朝日新聞 昭和十八年十一月十三日・東京 三村たつ代)

・戦友と共に作りし朝顔の押花なりと兵送り來し

(朝日新聞 昭和十七年九月三日・山形 大塚美爾子)

二首目、押花にされた花が儂い朝顔というのが何とも切ない。ロシアのウクライナ軍事侵攻に関してもそうだが、短歌は戦争を定型詩という形で記録し、人の心に訴える力がある。

このように戦争詠は近現代短歌において大きな存在感を示すが、古典和歌ではやや異なる。例えば、勅撰和歌集では真正面から戦を詠んだ歌は見られない。戦乱は王権を脅かすものであり、御代の安寧を言祝ぐ勅撰集にはそぐわないものである。この傾向は他の多くの和歌集にも共通する。だが平安末期、はつきりと戦乱を書き記した歌集があった。『建礼門院右京大夫集』である。

作者は右京大夫と呼ばれた女性で、建礼門院徳子(平清盛の娘で高倉天皇の后)に仕えた女房歌人である。清盛の孫・資盛(すけもり)と恋

仲になるが、源平の戦で平家は劣勢となり、彼は一門と共に都を去つた。戦乱による別れの悲劇を、右京大夫は次のように歌う。

「他に類例もないつらい出来事を眼前にしても、今まで通り日々を送る我が身が疎ましい」と嘆く。『右京大夫集』は源平の騒乱を、『平家物語』とは異なる宮廷女性の眼差しで描いていく。やがて資盛は戦死。それを知った右京大夫は次のように詠む。

・例なきかかる別れになほとまる面影ばかり身に添ふぞ憂き

・定めなき世とは言へどもかくばかり憂き例こそまたなかりけれ

ここでも自身が経験した悲劇を、他に例のない特異なことなどと詠う。王朝貴族にとつて、戦乱で変わり果てた世と親しい人の戦死が、いかに衝撃的で異例な出来事であったかが読み取れる。

だが数百年後、彼女の感慨とは裏腹に、『右京大夫集』に共感する人々が現れた。第二次世界大戦中に戦線に赴いた兵たち、そして彼らを送り出した銃後の女性たちである。折しも佐佐木信綱校注『建礼門院右京大夫集』(富山房百科文庫、昭和十四年)が刊行され、手に取りやすい本が世に出ていた。作家の大原富枝も小説『建礼門院右京大夫』(講談社、昭和五十年)のあとがきで、「私自身、ある人の戦死を今も胸に刻んで生きており、それがこの作品を書くモチーフともなっています」と記している。戦争中、人々の傷ついた心を慰撫した一面もあつただろうが、こうした形で『右京大夫集』が愛読されたのは何とも皮肉なことである。

もう二度と、右京大夫と資盛の運命に自らを重ねる読者が現れないよう、世界と向き合い続けるしかない。